

Revolution?, SAGE Publications, 1988.)

III

われわれ研究班の活動も、本年度（1994年度）をもって満4年目を終わり、研究成果の一端を、翻訳書の刊行というかたちで公にす

るところまでこぎつけた。次年度からは、西欧・北欧諸国を中心とした社会民主主義の歴史と現状を研究課題に組み入れ、本研究の幅と深さをさらにひろげたいと考えている。

研究班報告 2 オピニオン・ジャーナリズムの国際比較研究

馬場恒吾の政治評論の再評価をめぐって

和田 守

I

季刊誌『アステイオン』の34号（1994年秋季号）から、御厨貴東京都立大学教授の「政治評論家の運命」が連載されている。モチーフは、「ジャーナリストの先達、馬場恒吾。その生き様から20世紀の政治評論の意味を問う」という点にある。馬場恒吾の政治評論の再評価を通して、オピニオン・ジャーナリズムのあり方を問い直そう、というのである。

馬場恒吾（1875～1956年、明治8～昭和31年）は、英字新聞『ジャパン・タイムス』の記者・編集長（1900～09, 1913～14年）、ニューヨークで日本紹介の月刊誌として創刊された『オリエンタル・レビュー』の編集長（1909～13年）を経て、『国民新聞』の外報部長・政治部長・編集局長（1914～24年）を歴任し、1924年以後、フリーランスのジャーナリストとして政治評論に健筆をふるった。戦後は、正力松太郎追放のあとをうけて『読売新聞』社長（1945～51年）、日本新聞協会会長（1949～51年）をつとめている。

この馬場については、かつて、悪戦苦闘しながら、『日本政治学会年報1982年 近代日本の国家像』に「大正デモクラットの民衆政治論とフェンズムへの抵抗——馬場恒吾の言論活動を通して——」（拙著『近代日本と徳富蘇峰』に「馬場恒吾の民衆政治論」として収録）を執筆したことがあるので、個人的にも、御厨教授がどのように料理しているのかについては大変興味深いものがある。私は上記論文で、主に政治思想史上、馬場を大正デモクラットと位置づけ、その民衆政治論の構造と展開過程を分析した。とくに、大正デモ

クラシー期の思想家・言論人の多くが、15年戦争期に体制協力的役割を演ずるにいたったなかで、デモクラットとしての節操を守り抜いたジャーナリストとして高い評価を与えた。

これに対して御厨教授は、政治思想そのものよりは、政治評論家、コラムニストとしての馬場の再評価を中心課題としている。1924年以後フリーランス・ジャーナリスト時代の馬場は、『中央公論』『改造』『文藝春秋』など月刊総合雑誌への寄稿とあわせて、1932～40年には『読売新聞』紙上で「日曜時評」「日曜評論」のコラムを担当し、一週間ごとに、縦横無尽に政治評論を執筆している。御厨教授はこの政治評論の内容はもとより、そのスタイルと切れ味に注目しているのである。この視点は重要である。

それにしても、現在、何故、政治評論家馬場恒吾の再評価なのか。拙稿以後、毎日新聞の岩見陸夫氏がシリーズ『言論は日本を動かす』第8巻『コラムで批判する』のなかで、政治評論家としての馬場の人物像と言論活動について好意的に描いており、馬場の『自伝点描』も中公文庫に収録されるにいたった（解説雨宮庸蔵）。馬場の生き様と政治評論の意義が改めて注目を集めはじめてるのである。ついでに紹介しておく、戦後1945年9月から46年10月に及んだ大規模な読売争議の中心人物であった宮本太郎氏の『回想の読売争議』が昨年刊行されたが、同争議が第二段階に発展するなかで、正力松太郎に代わって社長の任にあり民主化闘争の矢面に立たざるをえなかった馬場に対する批判は押さえ気味である。馬場の人柄のせいなのか、また、

戦前、水戸高校在学時代から権力弾圧に遭った宮本氏にとって、戦時下抵抗の姿勢を崩さなかった馬場への共感がジャーナリスト魂のどこかにひそんでいるのであろうか。

それはさておき、現在、何故、政治評論家馬場恒吾の再評価なのか。オピニオン・ジャーナリズムのあり方を考えるうえで興味のあることである。

II

この点、御厨教授は次のように指摘している。国際的にはポスト冷戦期、日本においても55年体制崩壊のあとをうけて、それに代わる新しい体制が未構築の混沌状況にあるなかで政治評論も不毛状況に陥っている。そしてこの状況は、40年近くにも及んだ55年体制の存在と分かち難く結びついている。すなわち、戦後の政治評論は、保守系、革新系のいずれも55年体制を担った政党勢力と結びつきながら構成されてきたので、55年体制の崩壊は保・革政治評論の立脚点を喪失させてしまったのであり、1930年代に政治的危機が進行するなかで、政治の現場の世界（政界）と政治の論評の世界（言論界）の緊張関係をコラムを通して堅持し続けた馬場の政治評論に改めて着目してみる必要があるのではないか、というのである。

このような御厨教授の提言は、現状認識の枠組みに多少無理があるように思われるが、まずは当を得たものであろう。馬場の民衆政治論に関していえば、たしかに、私も指摘したように、理論的体系的なかたちで展開されたものではなく、いかにもジャーナリストらしく状況的発言として展開されており、この現実主義的態度と経験主義的方法をとった状況的発言は、単なる状況のイデオロギー的（体制的）裁断に陥ることなく、リアルな状況認識と身体的な批判性をもって展開されており、また状況の推移に押し流されない強靱な原理性を固守したものであった。馬場にとって政治評論の原点は、権力や権威に寄りそう「英雄主義」を拒否して、民衆の「健全なる常識」への揺ぎない信頼に依拠して議会制民主主義や政党政治の確立を要求する「凡人主義」に立つことであった。政治思想とし

てはこの「凡人主義」に立脚しつつ「英雄主義」に対峙する緊張関係であり、御厨教授の行論にそえば、国民の「日常生活」と政界との緊張関係を切り結ぶ位置に言論人としての立脚点を定め、政治評論の役割に賭けたということであろう。

「凡人主義」について、馬場は、「街頭政治論」として、次のように説明している。「政治上の意見は街頭の民衆の意見を反映するものでなければ無意味である。議員連の意見と街頭の叫びと、全く別々の世界で動くような状態では、政治其物が無意義になる。政治を議会より、街頭に引き出す」（『政界人物風景』1931年）ことが肝要である、と。民意を反映し尊重する輿論政治の主張であり、議会政治の代表機能への期待であった。そして当時の普通選挙制の実現はそのための制度的保障であったが、ことさら「政治を街頭にて」と提唱したのは、議会を制度的中核とするにいたった「政治の世界」を、「街頭」と形容された民衆の「生活の世界」に開放し、かつ基礎づけることを求めたからであった。制度の問題にとどまらない「政治の世界」のあり方の問題であり、議会の民衆的性格獲得の問題であった。

このように議会制民主主義の眼目は、「街頭の民衆の意見」を反映することにあつたが、「街頭の民衆」とは「生活の世界」で四苦八苦する「凡人」、政治的には「素人」のことであり、したがって議会政治の特色は、「凡人」、「素人」たる民衆の人間の良心や生活感覚、そして智恵と常識に依拠し、それを尊重することにあつた。「英雄主義」に対する「凡人主義」であり、「玄人政治」に対する「素人政治」の主張だったのである。

そして、「凡人主義」「素人政治」論に立脚するがゆえに、議会の代表機能とならんでその統合機能と議会政治の支柱たる政党の指導性に強い期待を抱いていたことに注目する必要がある。すなわち馬場は、議会政治の円滑な運営による「常識と真理の合致」に期待している。個別的利害の要求として現れる民意を汲みあげつつ統一的な国家意志を形成し、その過程で国民的合意を調達するという議会

政治の統合機能への期待である。馬場は「政治に於ける進歩も、他の方面の人智の発達と同じ道程を辿る。それは色々の経験を綜合する人智の働きに依る。その人智の働きの効果的になるのは、井底の蛙の如く、地中のもぐらもちの如く、役所に立籠りたる籠り作りたる少数の人々の独断に依頼することではなくして、広い世間の種々の角度から見た意見の自由な交換に頼ることではなければならぬ」(『国民政治読本』1936年)とし、あるいは「真理は権力や金力が圧倒的に規定し得るものではなく、すべての人々の自由なる討論に依って発見せられる」(『議会政治論』1933年)と指摘している。「自由なる討論」「意見の自由な交換」を通して国民的国家的利益を発見してゆくことに議会政治の役割を求めたのである。議会とは、このような「人智の働き」に広い視野と多様な視角を提供する制度的保障であった。

III

馬場の政治評論はこのような議会制民主主義の代表機能と統合機能に対する期待と表裏一体の関係で展開されている。ジャーナリズムにおける言論活動は、同様の役割を担うという点で議会制民主主義の発達に不可欠のものであった。そのうえ馬場は、権力に対するジャーナリズムの監視・批判機能を堅持する立場から、総力戦体制の進展にともなって翼賛政治が成立し、制度としての議会が形骸化した時点でも、議会制民主主義の精神を守る論陣を張っている。官僚的国家統制を厳しく糾弾しつつ、翼賛体制下の国民にこう訴えている。「積極的に善を行ふのがよいということは決定している。それを行ふ力がなければ、せめて悪に組みせざるだけの良心を有てといふのが普通人に対する要求である。これ

が独立の人格を守る最少限度であるからだ」(『国と人物』1914年)と、究極的には「人間的良心」を掲げどころとした、いわば市民的不服従の呼びかけであった。

国民にこのように呼びかけつつ、ジャーナリストのあり方として、馬場は次のように述べている。「刑務所に入る覚悟で活潑な筆を振る言論人は少なくな」り、「大体温和になった」が、この「風潮を是認すれば、言論が意気地がなくなること」は避けられない。「だが併し、言論人はそれで満足すべきであろうか。何とか其所に打開の途はないものかと思うとき、言論人と云っても、畢竟するに人間であるが故に、最後のところは、人として如何に此世に生くべきかと云う問題に行き当たる。これは言論人に限ったことではない。汎べての人の意気地があるかないかはその人の生活態度に依って決められる」(同前)と。もとより時として、「決死的勇氣」も必要になる。しかし、それとて人間としての日常の「生活態度」いかんによって決せられるとしたのである。それは、民主主義の原点であろう。

言論人馬場自らは、言論統制と弾圧の嵐がマルキストからさらに自由主義者に及んだとき、権力に迎合妥協することを拒否し、最終的には筆を祈る道を選んだ。

ジャーナリスト馬場恒吾の真面目はこのような点にあった。もちろん、時代状況と課題は大きく異なっている。しかし、馬場が示した真面目を再評価しつつ、現代の政治評論のあり方を問うことは重要なことと思われる。御厨教授の論稿連載は2回目、これからが本論であるが、コラムニストとして、このような真面目がどのように発揮されているのか、今後の展開が楽しみである。

研究班報告 3 分断国家の再統一化の政治経済学的比較研究

朝鮮半島の再統一は西ドイツ方式で可能だろうか？

安 世舟

本研究班は結成後すでに4年が経過した。その間、分断国家やその再統一化に関する資

料の収集に努めており、また各分担者は各々そのテーマにそった研究を続けている。しか